

## 知 識 探 訪

## 多民族社会の横顔を読む

協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

## クダ州の障害児者支援施設を訪れて

信田敏宏 ( 国立民族学博物館 / 総合研究大学院大学教授 )



自閉症の青年が描いたデザインのトートバッグ。施設のショップやイベントなどで販売 ( 筆者撮影 )

2023 年 12 月、クダ州にある障害児者支援施設をいくつか訪問した。

最初に訪問したのは、学校に通えない障害児の通所施設。マレーシアでは、障害のある子供たちは義務教育化されていないため、こうした施設で日中を過ごす子供もいる。1 人のインド人女性を除いて、職員のほとんどはマレー人女性で、子供たちもマレー系が多い。運動器具が置かれた部屋や、自閉症児がリラックスできる部屋、日本から贈られたミシンが並べられた部屋もあり、手芸品の制作や刺しゅうなどもするという。

次に訪れたのは、学校を卒業した人たちが、日中を過ごす通所施設。古代遺跡で有名なブジャン山の麓にあり、道路の向かい側にはバイク店や食堂、雑貨店といったマレーシアでは典型的な農村部の街並みが見えた。

施設は町の集会所の一角を借りて運営していたが、行政による資金援助が十分ではなく、自閉症の青年が描いたデザインをもとに、さまざまなグッズを商品化し、販売していた。施設では、染色や縫製、料理、掃除などをしてゆったりと過ごすそうで、イスラムのお祈りも日課になっているとのことだった。

その他、支援学校や、幼児の療育を行う民間施設、大学内に設置された障害者支援センターなどを訪問し、最後に、「ぜひ行ってください」「きっと泣いてしまうよ」と強く薦められた「希望の園」という名の国立の入所施設を訪問。場所はタイとの国境近く。女性刑務所が隣接していて、周囲にはアブラヤシのプランテーションしかない寂しい場所であった。

職員のほとんどはマレー人男性で、数人のマレー人

女性と看護師がいた。希望の園には、親が育児を断念したり、育児を拒否されたりした乳幼児から 14 歳までの子供たちが入所している。マレー半島部だけでなく、サバ州・サラワク州出身の子供たちもいるとのこと。予算の関係で、世話をする人が少なく、亡くなった子供たちの葬式も一苦労だという。

障害者支援を行っている篤志家のマレー人女性が同行してくれたおかげで、今回は特別に見学させてもらえたが、写真撮影は N G であった。

男子の部屋の扉は鉄格子で、男児たちが床に寝転んだりしていた。女子の部屋の一つでは、何人かの女児がベッドの柵に手足を縛られていた。以前、道路に飛び出してしまった子供がいたので、それ以来身体拘束をしているのだという。人員不足により、介護が十分にできないという理由で、子供たちは男女ともにオムツに丸坊主頭、小さいときはミルクのみの食事だそうだった。

子供たちの親は、この施設を訪れることはない。親の虐待によって脳を損傷し、手足がまひした女児がリハビリを受けていたが、親が訪問しない理由も推して知るべしである。

社会の周縁に生きる極めて弱い立場にいる人たちがどういった生活をしているかを見ると、その社会の成熟度が分かる。クダ州はマハティール元首相の故郷ということもあり、何年も前から国際協力機構 ( JICA ) が障害者支援事業を進めている。希望の園は例外で、概して、支援活動は活発で、支援に関わる人たちの意識も高く、オーストラリアや欧州からも支援のノウハウを学ぶなど意欲的である。

今後、少しでも子供たちの未来が幸せなものとなるよう祈りたい。

## &lt; 筆者紹介 &gt;

専門は社会人類学。マレーシアの先住民オラン・アスリを対象とした人類学的研究。2018 年より知的障害者を対象とした学びのワークショップ ( みんなく Sama-Sama 塾 ) を主宰。著書に『「ホーホー」の詩ができるまで——ダウン症児、こころ育ての 10 年』( 2015 年、出窓社 ) 『家族の人類学——マレーシア先住民の親族研究から助け合いの人類史へ』( 2019 年、臨川書店 ) など。